

## SEMINAR

## JNTO発

## 外客攻略のヒント

山下広 JNTOマドリッド事務所長

vol.124

## スペインの旺盛な訪日意欲

コロナ禍を経た今もスペイン人の訪日旅行に対する意欲は高い。スペインでは特段の出入国規制もなく、各国の水際対策や入国規制の緩和に伴い、コロナ禍前の状況に戻りつつある。訪日旅行は食や伝統・歴史・文化に加え、自然・屋外で過ごすことへの関心がより高まっている。

訪日旅行の人気の高まりを受け、コロナ禍前の19年のスペイン発訪日客は史上最高の約13万人となった。コロナ禍における日本の入国制限や検疫強化等により、21年は約3000人と大幅に減少したものの、スペイン人の訪日旅行に対する意欲は今なお高い。

6月1日現在、スペインでは特段の出入国規制や行動規制はなく、マスクの着用は一部の公共交通機関等を除き不要である。旅行意欲は引き続き高く、スペインにおける規制緩和と各国における水際対策や入国規制の緩和に伴い、コロナ禍前の状況に戻りつつある。

スペインの旅行シーズンは夏季シーズンに次いでイースター休暇前後である。スペイン国営放送局のRTVEは、「今年のイースター休暇は観光業界の転換点となったが、完全に回復したわけではない」と現地専門家が指摘していることを報じた。スペイン観光業経営者ボード(Mesa del Turismo)の会長によると、イースター休暇における国内のホテル稼働率はほぼすべての観光地で80～90%の水準で推移した。また、観光業界誌「Hosteltur(ホステルツール)」によると、スペイン鉄道の販売座席数は19年の60%水準に相当する200万席となったことが明らかになった。他方、エネルギーや食料の価格上昇により、「19年と同様またはそれ以上の売り上げを達成している半面、コストも大きく上昇している」と指摘している。

スペイン全国紙「La Vanguardia(ラ・バンガードディア)」は、スペイン航空会社協会(ALA)が

4月20日に発表した統計データを用いながら、スペインで運航中の航空会社はすでにコロナ禍前の運航便数に戻りつつあり、正常な状態に戻る日が近づいていると報じた。事実、イースター休暇の運航便数は19年の同じ時期の83%まで回復しているという。

しかし、6月3日現在、ウクライナ・ロシア情勢の影響により、日本とヨーロッパを往来する航空機はロシア上空の迂回を余儀なくされており、また原油価格の上昇に伴い、燃油サーチャージ代が高騰している。そのため、飛行時間の長時間化や旅行費用の上昇を招いており、こうした状況が中長期化した場合、漸次影響が出てくる可能性がある。

旅行情報会社Forwardkeys(フォワードキーズ)のデータによると、夏季シーズンにおけるスペインのアウトバウンド市場は19年の水準を25%下回っているが、スペインの特定のデスティネーションでは、すでにコロナ禍前のレベルを超えている。19年夏(7～8月)の予約水準を超えている主なデスティネーションは、エジプト(81%増)、アラブ首長国連邦(39%増)、スウェーデン(36%増)、タンザニア(28%増)、ギリシャ(23%増)、ドミニカ共和国(21%増)、カタール(21%増)、フランス(20%増)、モルディブ(10%増)などとなっている。

## 夏季の活況に期待

スペインにおける水際対策が緩和され、観光業界の活動も活発になってきたが、ACAVE(カタルー



1月下旬に開催された国際観光展示会「FITUR2022」では日本ブースを出展

ニャ州企業旅行専門旅行会社協会)の会長からは、旅行会社の経営状況は依然として厳しい状況に置かれていることが示された。ACAVEが会員企業約450社を対象に行ったアンケート調査では、旅行会社の約76%は予約件数や売上高が19年の水準に達するのは23年になると回答している。

その一方で、観光業界の回復が始まったという回答もあり、今年のイースター休暇では旅行会社の35%が19年と同等の売上高を達成したと回答している。これは、夏季シーズンにイースター休暇と同様の傾向をたどれば、来年には完全な回復が期待できることも示唆している。

ただ、観光業界における人材不足など、新たな問題も持ち上がっている。コロナ禍の約2年半は、旅行会社にとって非常に厳しい時期となったことは言うまでもなく、業界全体で15%の雇用が失われた。その失われた雇用をどのように観光業に戻していくことができるのか、問題であり、議論的になっている。

## 屋外でゆったり思い出に残る旅を

冒頭で述べたとおり、コロナ禍前の訪日旅行の人気の高まりは今なおお色あせず、訪日旅行を希望するスペイン人は多い。

JNTOマドリッド事務所が今年5月、各大手旅行会社へ消費者の最新動向についてヒアリングした結果によると、訪日旅行に関しては各社とも多くの問い合わせを受けていることがわかった。日本の入国規制のため訪日旅行ができないという状況でも、依然として訪日旅行を希望するスペイン人は多く、入国できることを期待している旅行者が多い。「日

## ●スペイン人の21年海外旅行

国内・海外旅行者総数	1億4289万人(前年比40.8%増)
うち海外旅行者	721万人(前年比42.2%増)
海外旅行の割合	5%(19年10.4%)
海外旅行の平均滞在日数	9.6日(19年7.1日)
1人当たりの海外旅行支出額	751ユーロ=約9.8万円 (19年798ユーロ=約10.4万円)
1日当たりの海外旅行支出額	79ユーロ=約1万円 (19年111ユーロ=約1.4万円)

コロナ禍による宿泊・交通・アクティビティー等の価格低下や支出控え

資料: Instituto Nacional de Estadística INE(スペイン国立統計局)  
※為替レートは1ユーロ130.96円(x-rate.com, 21年12月31日付)

本の入国制限次第では、アジア地域においてトップデスティネーションになる」との力強いコメントもあった。

コロナ禍を経て、旅行に対する姿勢も変わりつつある。密を避け、屋外や自然の中で過ごすことへの関心がよりいっそう高まっている。マーケティング会社のCOMUNICACION IBEROAMERICANA(コミュニケーション・イベロアメリカーナ)が5月にオンライン上の訪日旅行に関するコメントを調べたところ、抽出した669件のうち、日本の自然・屋外について関心を示す言及が最も多く、全体の約40%を占めた。続いて歴史・芸術が30%弱、食は17%となった。

このうち自然・屋外については、運動等の活動をするのみでなく、自然の中でゆっくり過ごすことも含めた屋外体験全般を想定している。食や伝統・歴史・文化といった分野は、コロナ禍前と変わらず関心が高い。

元来、バカンスがライフスタイルの一部として不可欠なスペイン人であるが、コロナ禍を経て人生の大切さに思いをはせ、より思い出に残る旅や大切な人と旅行したいと思う人が多く、旅行に対する愛着が一層増したとみられる。前述のとおり、訪日旅行への期待が高いことから、スペインと日本の間で観光客が自由に往来できるようになった暁には、他のデスティネーションと比べて訪日旅行の回復は早いと考える。

JNTOマドリッド事務所では、人気の食、歴史・伝統・文化面に加え、コロナ禍を経て、自然・屋外をより強化していく訴求テーマと考え、過ごし方の紹介に力を入れていく。訪問先のさらなる多様化も図っていききたい。

(次回は8月15・22日号に掲載します)